

繊維分野での有害物質使用ゼロの動きが進展

◆衣料ブランドが共同で化学品のスクリーニングを行っていく

2019年1月、衣料ブランドのLevi Strauss、Nike、H&M、C&Wの4社は、繊維製造に使われる化学品をより有害でないものに置き換えるためのスクリーニングを共同で行っていくと発表した。これは、各社が個別に行っているスクリーニングが似通ったものであり、共同のプラットフォームを作った方が効率的であることが判明したためである。

4社は、すべてZero Discharge of Hazardous Chemicals (ZDHC) のメンバーである。ZDHCは、11年に6つの衣料ブランドが有害物質の使用を抑制していく起爆剤になることを目的に作られたプログラムであり、現在、19のスポーツ用品メーカーやアウトドア製品メーカーが参加している。20年までに繊維分野での有害物質の使用ゼロをめざしてロードマップを作成し、活動している。米国のDuPontやドイツのBASF、中国企業などが協賛会社になっている。しかし、日本からは、ダイキン化学が協賛しているだけである。

◆アニリンフリーのデニムが開発された

タイのAbsolute Denimは、18年12月、染料のインディゴのすべてをアニリンフリーのインディゴに転換すると発表した。合成インディゴをはじめとした従来のインディゴは、アニリン中間体を用いて製造されており、未反応のアニリンを不純物として含んでいた。繊維メーカーは染色業者に排水の管理を徹底するように求めているが、年間300トンのアニリンが染色中に排出されている。なお、アニリンは米国EPAによってグループB2の発がん物質に指定されている。

5月にArchromaは、アニリンを使わないインディゴの製造方法を開発した。今回、Absolute Denimはこのインディゴを全製品に適用することを決定した。Archromaは、染色後のデニムからアニリンが実質上放出されることがないことを確認している。

繊維分野でも産業界の環境に対する自主的な活動が始まっており、有害物質を使わない製造方法への具体的な事例が出てきた。

【松村晴雄】